新刊紹介

吉田仁美著

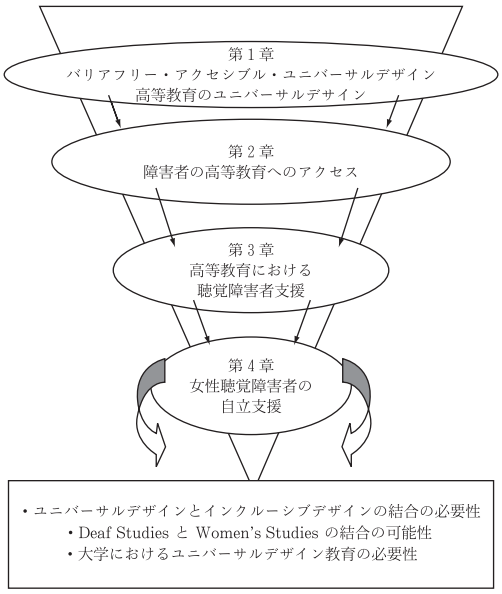
『高等教育における聴覚障害者の自立支援―ユニバーサル・インクルーシブデザインの可能性』

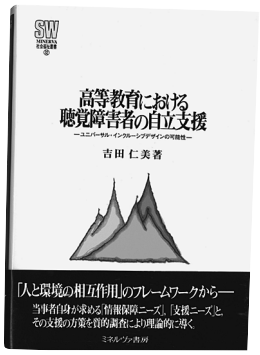
押谷由夫

私事で恐縮だが、著者の指導教員であった伊藤セツ先生の研究室は、私の研究室のひとつ下の階にあった。夜遅く帰るとき、ふと眺めると先生の研究室によく明かりがともっていた。私用でお伺いすると、きまって院生がいた。それが著者である。そのときに取り組んでいたのは、博士論文であった。その内容を部分的に加筆、修正したのが本書である。

本書の内容を著者は下のような図で表している。

ここでは、少し違った視点から本書を紹介したい。それは、研究とはどういうものなのか、そしてそれはどのように進めていけばよいのかについてである。本書を読みながら筆者の真摯な態度に触れ、改めて研究者の原点を思い知らされたからである。





2010年6月30日発行
ミネルヴァ書房
A５判　320頁
定価 6500円（本体）

まず、研究の動機である。どのような研究であれ、自分の興味関心が大切である。そして、研究者自身がどれだけその研究の必要性（切実性）を感じているか、によって研究の深まりが左右される。

本書の場合、研究の動機は明確である。著者自身が聴覚障害者であること。まさに自分自身が研究対象なのである。「当事者視点からの研究を進めることでユニバーサルデザインの思想を社会に根づかせたい」という著者の思いが、高等教育にそのフィールドを求めたととらえられる。そして目指すのは、女性聴覚障害者の自立支援である。それは、とりもなおさず著者自身が自立して生きていくことと重なる。研究の追究の姿勢において、研究者としてのあり方を堅持し、その方向性において自らの興味関心と信念を貫く、そのことが見事に一致している。だからこそ、最後まで読者をひきつける。

さて、フィールドを決めた後どうするか。関連分野の研究のレヴューである。著者の文献探索は徹底している。その中から、関連の深い著書や論文を丁寧に読む。そして、そこから本研究の独自性と方向性を明確にしていく。したがって、本研

究は、国際的にも高い評価の得られるものになっている。

その後「本書で使用する概念と用語の定義」を行う。その定義の仕方は、本書全体の内容に関係する。例えば、「障害自体が発展する概念である」「障害者は環境との障壁との相互作用で発生する概念である」「障害学生とは、人と人、人と環境の相互作用に何らかの障壁をもつ学生」と定義する。さらに、「自立」は「障害者が他の手助けにより多く必要とする事実があっても、その障害者がより依存的であることには必ずしもならない」という米国の自立生活運動が提唱する概念を採用する。そして、「自立支援」とは、「『私たち』という相互依存のパラダイムによって成り立つ『自立』の状態」であると定義する。さらに、「自立生活」とは「『生活自立』と同義であり」、「生活自立は、何らかの状況によって自分の力では生活を営むことの困難な人が、社会的援助を得て生活が出来るようになり、自己決定、自己選択、自己実現が満たされる状態におかれること、さらにはその範囲を拡大すること」という伊藤セツ先生の定義を使用する。

著者が求める「聴覚障害者の自立支援」は、単に外的条件をそろえるだけではない。むしろ、そのことを生かすことができる聴覚障害者の内的発達を促すものなのである。それは、聴覚障害者の新しい生き方を拓いていくことにもなる。この視点から本書を見ていくといっそう理解を深めることができる。

そして、いよいよ本論へと向かう。ユニバーサル・インクルーシブデザイン（著者の最も主張したいことであり、分かりやすくいえば「あらゆる人のための」「あらゆる人を巻き込んだ」デザインというようにとらえられる）を求めて、アメリカと英国の大学におけるさまざまな障害者支援システムの紹介と検討、分析を行う。文献だけではなく、実際の体験者や当事者へのインタビュー、現地視察や研究会への参加等をもとに展開される。そこからＩＣＴ（情報コミュニケーション技術）を活用した障害者支援に注目する。

そして、わが国における聴覚障害学生支援の検討に入る。大学としての取り組みの分析はもとより、聴覚障害学生個々人へのインタビュー、支援学生へのインタビュー、そして聴覚障害学生を含む演習・卒論指導の参与を通して、ユニバーサル・インクルーシブデザインのあり方について考察する。

本研究のテーマから考えると、ここまでで一応の完結を見るように思えるが、第4章が加えられている。ここでは、高等教育を終えた先にある女性聴覚障害者の生涯にわたる自立について取り上げる。その際、依拠するのが生活経営学的手法である。生活自立を柱に生活経営と生活主体形成について分析・検討・考察する。その後、まとめになるわけであるが、この第4章が加わることによって、本研究の独自性がいっそう際立つ形になっている。本書は、第三回昭和女子大学女性文化研究奨励賞を受賞している。

全体を概観して、著者が求めているのは、ユニバーサル・インクルーシブデザインのグランドデザインを描くことよりも、そのためのポイントを示し、各ポイントをどう実現していくかに興味があるように思えてならない。著者は本書を上梓して後、ＤＶＤ（「昭和を切り拓いたろう女性からあなたへ」）製作に取り組んでいる。ろう女性たちの体験や真摯な生き方が描かれており、思わず目頭が熱くなる。ユニバーサル・インクルーシブデザインの実現した社会とは、このようなろう女性たちとともに生きることなのかと実感をもってとらえることができる。著者のますますの活躍を期待する。

（おしたに　よしお　初等教育学科）